

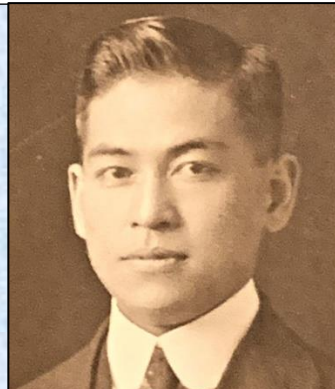
シリーズ後藤新平人脈考⑨ 鶴見 祐輔

新平の長女・愛子と結婚。後藤新平の死去後、「後藤新平伯伝記編纂会」が組織され、執筆者となった。昭和12年から13年にかけて全4巻発刊。衆議院議員や参議院議員として活動。国際人として「広報外交」で名を馳せる。

政治家・著述家。群馬県生まれ。東京帝国大学在学中新渡戸稲造から自由主義を学び、思想的影響を強く受けた。大学卒業後官界に入り、内閣拓殖局勤務。その後、後藤新平の長女・愛子と結婚。1911年鉄道省転勤。以後、14年間にわたり官界にあったが、鶴見の特徴は、後藤の配下から離れた退官後の自由人・国際人としての活動、「広報外交」にある。戦間期アメリカ各地において500回以上もの講演を行い、多くのアメリカの大衆に感動を与えた。



ウィルソン大統領、F・ローズヴェルト大統領を始め、アメリカ政府要人や知識人と交流を図った。小説や伝記などの文筆活動にも才能を発揮し、太平洋問題調査会の国際会議でも雄弁を揮った。戦前は、4回衆議院議員を務めたが、戦時中、戦争遂行内閣に協力したために、終戦後は公職追放を受けた。1950年に追放を解除されると、国土防衛民主主義連盟を組織し、また太平洋協会を復興させて活動した。1953年、参議院議員に当選。1959年脳軟化症に倒れる。以後療養生活を送り、1973年死去。



1885~1973

【妻：愛子】(1895~1956) 後藤新平の長女。18歳で祐輔と結婚。二男二女を儲ける。

【長女：和子】社会学者・上智大学名誉教授(1918~2006)

和子夫人没後すぐの誕生で「生れ替り」の意で和子名を授かる。1936年、女子学習院を卒業し、津田英学塾に入学。翌年夏、初渡米で作家パール・バックと出会う。1939年、ヴァッサー大学入学。1942年、第一次交換船で帰国。戦中は父の主宰する太平洋協会に所属。1946年『思想の科学』創刊、同人となる。1952年、生活綴方運動の指導者・国分一太郎と出会う。同年、「生活をつづる会」を作る。1959年、ドーア教授の招きでブリティッシュ・コロンビア大学へ。2年後プリンストン大学院進学。1964年、ブリティッシュ・コロンビア大学助教授就任。1966年帰国。成蹊大学助教授、上智大学教授歴任。1976年、不知火海総合学術調査団に参加し、石牟礼道子と出会う。1985年、中国の費孝通教授の誘いで江蘇省農村などの調査。1995年、脳出血で入院、左方麻痺。その後、伊豆、京都の「ゆうゆうの里」に。学術の他、短歌、日本舞踊などをこなし、学・芸一の独特な境地を生きた。



【長男：俊輔】哲学者・評論家(1922~2015)

東京高師附属小3年の頃不良化し、小学校をさぼって映画館に入り浸る。12歳の頃うつ病になり、入院。1935年府立高校尋常科に入学するも2年生の夏退学。1936年府立五中に編入し、翌年中退。1938年単身渡米し、マサチューセッツ州ミドルセックス校入学。1939年大学共通入学試験に合格。ハーバード大学進学、哲学専攻。1942年FBIに逮捕。収容所送り。卒業論文を完成させ卒業認可。1942年8月、帰国。海軍ドイツ語通訳志願。1945年結核性腹膜炎で療養中敗戦を迎えた。戦後、「思想の科学研究会」を結成して雑誌「思想の科学」創刊。1949年4月京都大学助教授。1951年うつ病再発、入院。1952年1月退院。1954年11月、東京工業大学助教授。1961年同志社大学教授。1970年、大学紛争での警官隊導入に反対し同志社大学教授を退職。

2000年以降、日本共産党支持の姿勢を明確にし、九条の会の呼びかけ人となる。2015年、肺炎のため死去。



【二女：章子】著述家(1928~)

東京女子大・京都造形芸術大学卒業。俳句結社「玉藻」同人。著述家。2018年、鶴見家の人々について語った『看取りの人生 後藤新平の「自治三訣」を生きて』を刊行。



【二男：直輔】著述家(1933~1996)

三菱商事勤務。「プロジェクト・チーム」の編成と運営：組織動態下の方向(倉橋宏・鶴見直輔編)、「サラリーマン働きがいの研究―「これから」をどう生き抜くか」(鶴見直輔著)

